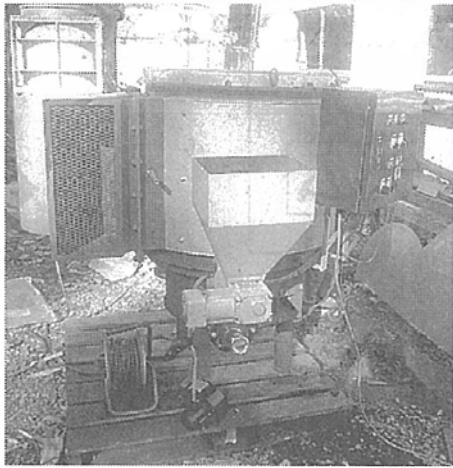


疾測量

竹炭燃料で温水システム

温泉・農家向け 重油代替需要狙う

測量会社の疾測量(山梨県甲斐市、石井敬康社長)は九月、竹炭を燃料とする温水システムを売り出す。温泉旅館や農業用ハウスに専用ボイラーを設置し、竹林で間伐した竹を炭にして供給する。価格変動が激しい重油の代替燃料として売り込む。放置されている竹林の整備にも役立つとみている。



九州工業大学の森口哲次助教が考案した技術を活用するボイラー

有機化学が専門の森口哲次・九州工業大学助教が考案した技術を使い、柳川芳鉄工所(山梨県昭和町)が炭化炉とボイラーを製造する。連携して新事業を始める中小企業を支援する経済産業省の補助金三千万円を機器製造などに充てる。ボイラーは粒状にした竹炭を直径〇・九センチ・高さ一・六メートルの円筒型の装置内で燃やし、管を通る水を加熱する仕組み。価格は設置費を含めて一台四百万〜八百万円。設置保守は富士冷暖(甲府市)が請け負う。

竹炭は一キロ六十円前後で供給する予定。A重油を月間一万リットル使用する温泉旅館ならば、同じ熱量を出すのに竹炭一万三千二百十キロが必要になるといふ。現時点では重油が値下がりしているためコストはほぼ変わらない

いが、昨年のような急騰に備えることができる。原料として竹産地である山梨県の身延町や南部町で間伐竹を仕入れる。専用の炭化炉をトラックに載せ、現地で竹を炭化し輸送費を抑える。竹林整備の収入源を得たい市

町村や森林組合には炭化炉を一台三千五百万〜四千五百万円で購入する。疾測量の二〇〇八年五月期の売上高は三億五千万円。竹炭を燃料とする温水システムの一四年五月期の販売目標は九億円。

森口助教は「竹林は根を深く下ろさないため山崩れの原因になり、森林に比べ二酸化炭素(CO₂)吸収量も弱い」と指摘する。竹林整備の必要性を訴え、疾測量のシステムで間伐竹の地産地消を促す考えだ。

日本経済新聞 平成21年3月3日付